

第8期 第6回 静岡市行財政改革推進審議会 会議録

1. 日 時 平成31年2月18日(月) 13:30~15:30

2. 場 所 静岡庁舎 新館9階 特別会議室

3. 出席者 【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田眞委員、内山和俊委員、  
小泉祐一郎委員、小島孝仁委員、坂野眞帆委員、鈴木貴子委員、  
西尾眞治委員

【行政】

岡村文化財課長、矢澤参与兼文化振興課長、  
宮本登呂遺跡担当課長兼登呂博物館長、永田芹沢銈介美術館長、  
草分駿河区役所地域総務課長、  
三宅総務局参与

〔事務局〕

遠藤総務課行財政改革推進担当課長、上原副主幹、兵庫主査

4. 会議内容

(1) 開 会

(2) 議 事

答申骨子案について

(3) 今後のスケジュール

(4) 閉 会

審議会内容は以下の会議録のとおり

田形和幸会長：早速だが次第2の議事に入る。今回は事務局から示された答申の骨子案について審議いただく。本日で実質的な審議は終了となるため忌憚のない意見をいただきたい。資料1及び2について説明をお願いしたい。

〈略：事務局説明〉

田形和幸会長：いまの事務局からの説明について、どのような点からでも結構なのでご意見をお願いしたい。

小島孝仁委員：資料1の9ページ「イ 日常生活に溶け込む『サードプレイス』としての場所」の中に、田植えの前に大人も子どもも参加できる泥遊びイベントと書いてあるが、泥遊びはそういう目的よりは、6ページの「イ 非日常の中で特別な体験を楽しむ」ためのイベントとして提案した。

事務局：了解した。

小島孝仁委員：周りの人々に、きれいなシャワーブースがあって着替えられるとしたら、登呂遺跡の田んぼの中で泥まみれになる体験をしてみたいかと聞いたら、非常に反応が良かった。非日常体験ということでは非常に発信力があるのではないかと考えている。

事務局：6ページの非日常体験の中に移し、記述もそのように変えさせていただく。

小島孝仁委員：日常的に地元の方に来ていただくということと言うと、むしろカフェやレストランがサードプレイスとしての場所になり得るのではないかな。

事務局：了解した。景観作りということと、サードプレイスとしてのカフェやレストランという、観光客も含めて居られる場所というような整理の方がしっくりくるかもしれない。

小泉祐一郎委員：資料2の一番下に「登呂博物館と芹沢美術館の入館者数が減少傾向にある」ということが課題として設定されている。それも一つの面ではあるが、行革審で取り上げてこれだけのメンバーを揃えたのは、施設の入館者数が減ってきているからではないと思う。田辺市長が最初におっしゃったことは、私の理解では、市にはさまざまな歴史資源があり、文化施設としてはそれなりにやってきているかもしれないが、それらをもっと有効に使い、観光資源として静岡市の活性化に活かすような方策はないかという問題意識があり、そのモデルケースとして今回の登呂遺跡を取り上げているのかと思っている。もう少し広く全体で捉えると、文化施設を観光資源として活用していくためにはどうしたらよいか、という課題があるのではないかな。博物館の展示の中身をどうするかという話をしているのではない。最初の「背景」や「登呂エリアの現状」の部分にそこを出していただくといいのではないかな。文化施設として、保存して展示して、研究するという点ではそれなりによくやられていると思う。それとは違う観点で、観光施設として捉えてやるということがはっきりと分かるようにした方がいい。課題から上の部分はこれでいいのだが、最初の書きぶりは、単に入館者数が減少しているというのではなく、何を目指してやっているのかということを入れ、もう少し課題の設定を大きめに捉えた方がいいと思う。その中でももちろん入館者数の問題はある。だが、入館者数さえ戻ればいいという話ではなく、もっと市全体の観光資源として活用されることが重要だ。泥遊びイベントの話がなぜ出てくるのかと言えば、そういういろいろな要素によって観光資源としての活用を図ることに繋がっていくからだ。それから、7ページに公の施設の使用について書かれているが、民間の文化団体や農業団体を活用する中でネックになるのが公の施設の管理という点だ。厳密に言うとなかなか厳しいところがあるが、受け身の姿勢で応募が来たら審査するというのではなく、むしろ市の方から積極的にこういう形でぜひご利用くださいと投げかけていくことが必要だと思う。期間限定でもいいし、場所限定でもいいし、それぞれ条件はつくと思うが、登呂遺跡に限らずいろいろ

な資源を活用していくので、受け身でやるのではなくもっと前向きな姿勢が必要だ。行政財産の利用についても目的外ではなく、行政目的そのものとして利用するという形で、積極的な利用を図っている自治体も出てきている。いろいろな団体とのコラボレーション、民間活用についても、そういう趣旨を大きく入れていただけるといいのではないか。

内山和俊委員：いまの小泉委員の意見には大賛成だ。10ページに「市内外の観光施設等とのネットワーク化」というのがあるが、いろいろな観光地の観光施設に行くと、たくさんの人に来てもらいたいという各施設の思いを感じる。静岡市全体での底上げが必要だということ进行全面に出すことが必要だ。5ページ中段に、現在広場のようになってしまう水田跡についての記述があるが、水田や水路の活用が十分できていないと感じている。持っている能力をフルに活用することに期待したい。7ページに「地域に対する誇りを育む」ことについて書かれているが、「しずおか学」のような取組をもっと強調して実現に向けて取り組んでいただきたい。郷土の誇りとしての存在感の醸成については、いろいろなところでそういう話を聞くので、ぜひそのところも力をいれていただきたい。

岩井泰次郎委員：前回もディズニーランドは単館入場料ではなく、パスポート制だという話をした。せっかく芹沢美術館に来たのだったら登呂博物館にも行ってほしいということを見ると、私は単一価格にしてもらいたい。ランニングコストを入館料で賄い切れず、ある程度税金で賄っているのであれば、日本平夢テラスに来た人に登呂博物館に来てもらうよりは、芹沢美術館に来た人に登呂博物館に来てもらった方がよほど楽だ。その入場を有料ゾーンに関しては全館フリーに動けるようにしていただきたい。それから、アクセスの問題だが、どのバスがどこに行くかが分からないという問題に関しては、ピクトグラムのように絵を見ればわかるような、言葉を使わずに伝えるような工夫があればいい。観光施設に行くルートが分かりやすくなれば、もう少し回遊性が高まって、ついでに寄ってもらうということが可能になると思う。

植田真委員：ひとつは登呂遺跡までの足の確保が必要だ。いま駿府浪漫バスがあるが、駅の北側しか回らなくて南側には行かない。南にもいろいろと見るところがあるから、そういうところをセットにして1日乗車券という形で売らないと、なかなか普通の観光客は行きにくい。神戸や名古屋でそういうバスに乗って観光したことがあるが非常に便利だ。もう一つは、登呂遺跡の中の話になるが、稲作などをやっているために泥んこの道を歩いて行くのはなかなか難しいという話があった。それについては例えば木の道を作るのはどうか。知床などに行くと、知床五湖の周りには木の道が架かっている、バリアフリーで車いすの方も行けるようになっている。そういう風に中のアクセスも工夫したらどうか。もう一つは、弥生時代にタイムスリップするという経験をどのように表すかということで、バーチャルリアリティのような、眼鏡を掛けたら登呂遺跡の映像が出てきてその時代にいるような、手段の話になるが、そういうこともできたらいい。

鈴木貴子委員：レンタサイクルステーションについてだが、いま静岡市周辺のレンタサイクルの現状は、静岡市周辺のビジネスホテルに協力をいただいて、各ホテルに大体3台

から5台程度置いてあるという状況だ。どこのホテルにも置いてあるということではない。しかも静岡駅の南側では置いてあるホテルはかなり限られている。旅行者にとって、バス同様にレンタサイクルがどこで借りられるのかが分からないのが実情だ。ホテルの宿泊客でなくても利用できるが、その日にレンタサイクルの空きがあるかどうか、電話でいちいち問い合わせするか、ホテルのフロントまで行かなければ分からない。そういう点も検討する必要がある。東京や海外などでは、レンタサイクルは乗り捨てが自由になっていて、しかもモバイル決済アプリや電子マネーなどによりキャッシュレスで利用できる。その場所に行けばレンタサイクルが利用できるという環境を作ること検討する必要がある。それに関してはコストがかかるかもしれない。次にサードプレイスについては日本平夢テラスのような形が面白いのではないか。日本平夢テラスでは、静岡市の製茶問屋さんが入って静岡茶を出したり、あるいは静岡茶を使った、あるいはそれに合うスイーツを提供している。登呂遺跡に予定しているカフェやレストランについても、製茶問屋に限らないが、ぜひ静岡のものを使って地産地消ができるような人に入ってもらい展開していくことで、より静岡のことを目で見、味や匂いで楽しむことができる。静岡茶の入れ方ワークショップなどもできると思った。8ページに小学5年生時に社会科見学として登呂遺跡を訪れると書いてあるが、同じように静岡市内の小学校でお茶の美味しい入れ方教室というものを実施している。そういうものの一環として、お茶や歴史、文化を学べるように、各課や教育委員会等と連携してやっていくと面白いのではないか。

事務局：いったん整理をさせていただきたい。小泉委員からご指摘いただいた全体の課題についてはおっしゃるとおりだ。出口の部分は地域の活性化だ。いま、小さく入って大きく出るというような作りになっているが、当然市長の問題意識としても、これから歴史文化施設ができるにあたり、いままで保護が中心であった歴史文化資源というものを活用していかなければならないというのが出発点としてある。その辺りは、新たな観光資源としての活用ということが伝わるように直していきたい。それから、公の施設の使用許可の話については、広く門戸を広げるために積極的に使ってくださいと市から打ち出していくというイメージでよろしいか。岩井委員からは、共通券のような、エリアとしての共通パスポートの話をいただいたが、入れる場所は「市内外の観光施設等とのネットワーク化」の部分だと少しずれてしまうだろうか。市全体としての回遊性もそうだが、エリア内における回遊性も重要だということでも理解してよいか。内山委員からは水田跡の活用についての話をいただいた。水田跡については田んぼとして復元することもあるが、以前内山委員からご意見をいただいたように自然観察とか環境学習としての使い方もあると思っている。そのような要素もできれば入れていきたい。

内山和俊委員：もう一点、古代米もぜひ活用していただきたい。せっかく稲作で作って収穫するわけだから。親子で古代米を収穫するようなイベントを現在もやっている。それをもう少し広げていって、全面に出していった方がいいのではないか。

事務局：具体的な部分をどこまで答申に落とし込むかは難しい部分もあるが、少し考えさせていただき、また答申書をまとめた段階で確認させていただく。植田委員から出たバ

スの話についてだが、観光ルートを巡るバスとして駿府浪漫バスがあるが、現状は利用状況が非常に厳しい状況だ。このまま続けていくべきか否かという議論がある中で、それをさらに拡大するとなると当然コストの問題も出てくるため、そこは行政の立場としては慎重に考えなければならない。答申に組み込むとなった時にどういう風にするか。単純にいまの駿府浪漫バスを登呂エリアまで伸ばすという話になってしまうと、行政としては苦しい部分がある。もちろん審議会としてそのようにまとめていただくことになれば当然受けるのだが、採算面で非常に厳しい面があることをご承知おきいただきたい。もう一つ、自転車の話があったが、現状としてはまだまだ不十分であるが、いま「自転車のまち」を推進する事業があり、交通政策課という都市局の部局で進めている。ステーションを増やしていく動きがあるので、そういうことでカバーできると思う。まだ動き出したばかりなので、その辺の動きも踏まえてということになるかと思う。

西尾真治委員：10ページのA、B、Cに書かれているのはかなり個別具体的なことになるので、もっと前の方に持っていく方がいい。4ページに「具体的な取組」という項目がありながら、あまり具体的な取組の記述がない。だから前に持ってきた方がいい。関連して、その内容が資料2の左側に「歴史・文化資源を線でつなぐ」として書いてあるが、線でつなぐというのは弱い。線でつないだうえて、その下の方には「ネットワーク化」と書いてあるが、まさに面として展開していくということだ。さらには、さまざまなプロモーションも含めて展開していくということで、ここはかなり幅広く資源の活用を考えていくということになると思う。その時に、ここにあるA、B、Cはいままでなかなか行政では出なかった視点が書かれていると思うが、行政側でこういうことをやると決めて行動するのはなかなかやりづらいのではないか。もっと幅広く、前広に民間のアイデアを入れていかないと、そもそもアイデア自体が陳腐なものになってしまう可能性がある。これは進め方の話であるが、最近パークPFIということもあるが、行政側で全部仕様を決めて公募に出すというのではなく、できれば仕様を検討する段階から民間とのコミュニケーション、サウンディングをしっかりとやるのが大切だと思う。例えば、カフェを単体に入れるという話ではなく、カフェを入れたいという民間側で植樹も一緒に提案できるということであれば、プロモーションも併せて一緒にできるかもしれない。できるだけ前段階から民間との対話を行い、その中でアイデアを打っていくことが大事ではないか。もう一点、10ページの内容を前に持って行った後、「むすびに代えて」の部分がどうなるかと考えたのだが、やはりモデルケースということが想定されているのかなと思う。今回やったことを他の資源を検討する際にモデルとして活用できるのではないかという観点で考えたときに、何にモデル性があったのか。私は審議会のやり方自体が一つのモデルになっていると思った。登呂遺跡や芹沢美術館のことを知るために、みなで現地に行き、専門家やいろいろな人が集まって意見を出し合い、その中で新しいアイデアが生まれていく、そのやり方自体にモデル性があるのかなと思った。これを広げて行けばいいのではないか。なかなかこれだけのメンバーを集めるのも難しいと思うので、協働という観点でより多様な市民も一緒に入れて、市民の中で資源につい

て学びながら自分たちでプロモーションの在り方を検討していく。そういうことをやっていると、それがシビックプライドにもつながっていくと思う。市民100人ワークショップみたいな感じで、登呂遺跡をどうするのかをみなで話し合う。シビックプライドの醸成ということでポイントになるのは、市民が単に施設を利用する利用者にとどまるのではなく、自ら施設を広げて行くというか、価値を創造して発信していくプロモーターの側にも入っていくということが、シビックプライドのポイントだと思う。活用にどんどん市民を巻き込んでいくという観点で捉えていくといいのではないか。

坂野真帆委員：何が抜けているかを考えた時に、人というものが抜けていると思った。今ある登呂エリアの価値をきちんと見極めて、正しく発信することが原点にあるとお伝えしたが、その価値を正しく見極めて理解している人がどこにいるのか。それをきちんとその方なりの切り口でプロデュースして、その価値を高めるような側面的な整えを行っていく。そういうところを誰がやるのかということが、この行革審では「民間」とか「地域の住民」というようなところに落ちてしまっていて、結局誰がやるのかがはっきり分からない。文化的な価値を正しく理解している方は施設にいらっしゃるのか。学芸員の方々がいて、その方々がその方々にしっかりと発信していく機会を作ったらどうだろうか。観光面から考えたときに、観光のプロがプロデューサーとなってどういう風に活用していくのか。やることは見えるけれど、それが一つ一つ切り分けられている。全体を見てプロデュースする人間が誰なのかというのが曖昧になっていて、行政だけではやりきれないから民との連携とか地域に期待という風になっているように感じる。人材をどうするかという部分があるともっと説得力がある内容になると思う。それから、小さなエリアの、限定した施設の複合体という風に見えてしまうのはもったいない。一つのモデルという考え方もあるし、もう少しネットワークみたいなところを協調してもいいのかなと思う。

事務局：坂野委員がおっしゃられた人の部分は事務局の中でも話になった。事務局ではステークホルダーという言い方をしていたのだが、誰にとって何が課題なのか。いま取組の部分の話をさせてもらったが、それを誰がやるかという人に落としていったときに、まだ分析や課題の整理が足りない部分が出てくるのではないかと話している。物販の事業者にとって課題は何かといったときに、何となく、物販事業者は収益を得たいが来訪者が少ないというのが課題だろうと、ぼんやりとした整理はできるのだが、その深掘りがなかなかできていない。ステークホルダーを周辺住民と置いたときの課題はまだ見えていないし、来訪者の方や来訪者予備軍、まだこのエリアを知らなくてこれから来る可能性のある人たちに対して何をしたらいいのかとか、そういうところが今後取組を実際に行っていく中ではまだ足りない部分だと認識している。これらを答申までに詰めるのはなかなか難しいところがあるから、その辺りの課題が残っているということを答申書の結びの部分で表現できればいいと思っている。

小島孝仁委員：人の部分で、先ほど西尾委員から民間の市民を入れるという話があったが、誰を入れるかは重要だ。この施設の目的が経済的にきちんと経費が賄えるようにしていくことだとすると、その人がどんな仕事をしてきたかというのが結構重要になると

思う。要は、人を集める仕事に属していた人が適しているのではないか。登呂遺跡のポテンシャルをいかに使って、新鮮味を落とさずに新しいものを提案しながら情報発信して、毎年毎年人が来てくれる状態にできるという人がいないと難しいと思う。登呂遺跡や弥生文化に興味がある人はいまの状態でも来ると思う。ではどんな人が来ないか。例えば外国人で歴史に全く興味がない人、あるいは県外に住んでいて歴史に全く興味がない人は絶対に来ないと思う。その人たちの中でもちょっと興味を持って行ってみようかという人が増えてくればかなりボリュームが出てくると思う。その人たちをも呼び込んで、そこから歴史を知ってもらうという流れではないかと思う。あれだけの規模の施設を運営するときは、ある程度ハード設備をイニシャルで投資した後に、やってみなければ分からない、足りないものがいろいろと出てくる。すぐにブラッシュアップというか、足りないものを補充していく資金も重要だ。それを年度年度でやっていくと、一年は割と長いから、すぐに必要なものを設置しなければならないのにそれができないということになれば、問題になってくると思う。ある程度経営者感覚を持った人が運営していくのがいい。作ることもだが、その後に運営していくということもすごく重要なので、いかに継続して人を集めていけるか、その辺りも監督できる人が適しているのではないか。

西尾真治委員：運営しながら改善していくということが本当に大事になってくる。では、何をもって改善していくか、その根拠となるデータがない場合が非常に多い。そのデータがきちんと取れるように整備していくことを併せて検討されるといいと思う。例えば、初めて来た人とリピーターは、数は同じでも中身は全然違う。来た人が初めて来たのかりピーターなのか、それをきちんと分けて、それが施策とどう関係しているかというのを分析できるようなデータの取り方が必要だと思う。

田形和幸会長：ここで一旦休憩とする。

#### 《休憩》

田形和幸会長：再開する。引き続き意見交換を行いたい何かあるか。

小泉祐一郎委員：他のいくつかの市の施設についてもやった方がいいかもしれない。登呂遺跡は特別史跡ということもあり意外と難易度が高いかもしれない。むしろ、他のいくつかの歴史文化施設をパッケージ化して、その中で提案募集をする。提案してくれたところに今度はサウンディングで聞きに行き、その中でまた検討してと、そのやりとりは先ほど西尾委員が言われたように、ぜひ民間の知恵を入れていただきたい。登呂遺跡限定でやるよりも、もっと簡単などころもあるので、簡単などころの成功事例をひとつ作って、むしろそれを持ってきた方がいいとも思っている。登呂遺跡限定ではなく、市の中で絞ってやられてはどうか。それから非常に細かい話だが、資料2の「②訪れた人が楽しむ」の中の「ア 非日常的な景観・空間を楽しむ」ところの例として、「植樹等による弥生時代を体感できる景観の演出」とあるが、ここに内山委員がおっしゃった水田跡のことが入っていると思う。そこは「等」と表記せずに、田んぼのことが出てくる

ように工夫された方がいい。もう一つ、静岡鉄道は県立総合病院から済生会病院のエリアで無料のタクシー相乗りサービスの社会実験を23日まで実施している。クルーズ船で来日した外国人観光客を対象とした社会実験もJTBと一緒にやってやっている。このような相乗りタクシーは静岡鉄道がまだ認可を取っていないので無料で実施していると思うが、後々認可を取るといふことであれば有料化するだろう。相乗りタクシーを活用するとすれば、路線バスとは違う横軸で結ぶとか、路線バスとは違う結節点で乗り換えを可能にするとか、そういうことも含めて検討してはどうか。これから議会へ説明して予算を取って、来年度から始めるという社会実験であるが、来年度もさらにやるようであれば、観光施設の横軸、例えば登呂と久能山、日本平、日本平動物園など、バスだと一回駅まで戻ってこなければならぬエリアを横軸で結ぶことも考えられる。このような交通政策的な取組をうまく活用するのも一つの手段かもしれない。

田形和幸会長：静岡にははとバスのようなものはあるのか。

鈴木貴子委員：土日のみだがある。

田形和幸会長：登呂博物館長は皆さんの意見を聞いてどうか。

登呂博物館長：民間の参入については、カフェを入れるにしても、博物館の中にただカフェスペースを作るだけでは意味がないと思っている。エリア全体ということでは、登呂遺跡の周辺に民間の方が出店することで経済効果が生まれるという話があった。博物館の中にカフェを作るのが目的ではなく、民間が参入できるということをもう少し自分の中で整理したいと考えている。

田形和幸会長：民間の方に、答申の中でしたいことと、それにプラスして周りで何かやっていただけるようなことを、手を挙げてもらうということができればいいと思っている。土地の所有者の方もいらっしゃるとは思うが。

小泉祐一郎委員：何か成功事例をつくり、徐々に相乗効果を図っていく。最後に目指すところは登呂遺跡の入館者数が増えるだけではなく、周りに民間のお店が参入するようになっていくことが文化施設を活かした活性化だと思う。目指すところはそっちだ。そのためには、最初から大きくは成功しないので、最初は呼び水になるようなものから始めていくといい循環になっていくと思う。

事務局：優先順位については、どこから手を付けて、どういう風に取り組んで行ったらいいのか行政として迷うところがある。まずはブランディングというか、何を中心にアピールしていくか、誰にアピールしていくのかを考えたときにどうしたらいいか。一つは専門家に任せるのが手なのかもしれないし、西尾委員から話があったように市民との協働の中で魅力を考えていく、この審議会のような場で考えていくというのも一つの手なのかもしれない。まずはそこに取り組む。あとは、特に登呂遺跡に関しては景観作りがものすごく重要であると思っている。他のエリア、他の歴史文化資源も同じだと思っている。それから、体験などについてはできるところから手を付けていくという形になるとイメージしているが、その辺りはいかがか。

小泉祐一郎委員：いくつかのテーマがあり、時間がかかるものもある。それぞれ手を付けていく要素はあると思うが、やはり早めに手を付けるべきは景観の部分かと思う。この

審議会の答申に対して市長もきちんと予算を付けると言っている。民間参入でやるのであれば、それは一つの大きな取組なのでまた予算要求は必要だとは思いますが、なかなか既存のものに景観形成するからと要求してもそんなに簡単に予算は付かないと思う。今回の審議会の答申を受けて景観的な要素をしっかり作っていくということになれば、例えば初年度は計画を作る予算が付くとか、どういう景観にするか専門家を入れて設計図を作る予算が付くとか、きちんと予算措置をともなって数年計画で進めることが必要だと思う。スマートインターからの案内にしても、登呂遺跡だけの話ではない。大谷にスマートインターができたときに、市内への案内をする中で観光施設への誘導をどうするか。行政の場合、きちんと計画を作ってこうやるということが決まれば、順次きちんと予算が付いてくる。何をやるかを早めに計画的に決めていく。もう一つ、民間参入で活性化するという点については、これは早めに計画していくことが必要だ。すぐには参入できないから、どういう条件だったらどうなるのかということについて、登呂博物館がメインではなく市の管財課的な部門、あるいは公共資産や景観の部門か分からないが、もう少し市全体の観点からやっていく中で、モデルとして登呂遺跡はどうかという流れでやった方がいいのではないかと。

田形和幸会長：私も民間なので、市の予算の立て方がわからない。答申した後でどういう形で進んでいくのが重要だ。民間を入れようとなったときに、プランニングしてほしい、金額的にはこの予算でやりたいと伝え、相手方からどこまでできますというのをもらって、決定するのか。先ほど規制緩和の話がでたが、いろいろなところでどういう形でこの答申をしていくかというのが大事だ。できるところからやっていくのだと思うが、市が予算を付けるとなると、今年はプランニングの予算なのか、それともできるところの予算を付けてくれるのか。それによって、民間にお願いする中で今後どうするかというのは、これからまた議論するのかなと思う。具体的に答申をした後、これは事業計画か何かに提案されるのか。

事務局：その辺もこれから少し考えなければならない。登呂博物館と芹沢美術館だけの話に収まらないというときに、今回審議会に出席していない行政側のメンバーも参画した形で何かしらの話し合いの場を持たなければならないと思っている。行政はとにかく時間が掛かりがちだ。その辺のスピード感をどのように持って、あとはフレキシビリティとか、この手を打ったがだめだったから次はこうしようというような、即時的なスピード感をどのように持って進めていくか。実はそこは未知の領域で、いまのところ静岡市の事業でこのようにいろいろな課が関わるようなものをスピード感を持ってやれているところは正直ないと思っている。そこがまさしくモデルケースというところになっていくのかもしれない。掛川市は民間活力の活用という点では先進的な市である。掛川城は公の施設ということで指定管理という制度を使って民間企業が管理をしていて、いまはホテル事業者が指定管理者となっている。指定管理については委託をイメージしていただきたい。これまでは市が仕様書を作り、それとプラスアルファで何かやってくださいというのが通常の形だ。しかし、掛川城については、業務水準書という形にして、利用者満足度が90%以上、年間入館者数が何人以上であれば、あとは何をやってくれても

かまわないというやり方をしたのが新しく、全国的に指定管理の先進事例として取り上げられている。このように、行政でも民間との連携の仕方がだいぶ変わってきている。そういうことも含めて、登呂博物館、登呂エリアに関わらず、今後歴史文化資源の活用ということでは考えなければならないと思っている。

小島孝仁委員：優先順位については、視察に行ったときに景観についてはみな同じように感じたこともあり、景観をきれいにするということは最初にやらなければならないことだと思うが、景観だけで人を呼べるかということそれはなかなか難しい。景観プラス何か。景観と相性がいいのは何かというと、景観のいいところでお茶を飲みたいという需要があると思うし、地元の方々が時間がある方はいると思うし、ママ友が集まる場所にもなるかもしれないし、やはりお金を落としてもらおうという意味では、景観+カフェがスタートとしてはいいのではないかと思う。あとは、泥まみれになれるというのは話題としてかなり遠くまで人を呼び込むと思うから、都会の方を呼び込むにはかなりいいアイテムになるのではないか。そんなにお金もかからないのではないか。シャワーを作るのはお金がかかるかもしれないが。

文化財課長：シャワーはある。東名の高架下のところに体験サポート施設というのがあり、そこでは田植えをやるが、泥になる人もいるだろうということでシャワーが用意してある。いまはそれが十分使えていない。いまおっしゃっていただいたことは、あまり投資しないのでできる可能性がある。

田形和幸会長：他に何かあるか。

事務局：この後、答申の本章ができたときにもう一度確認させていただくタイミングがあるが、お気づきになった点は随時メール等でお知らせいただければ反映したい。

田形和幸会長：他にご意見等がなければ本日の審議は以上としたい。今回の審議を踏まえて答申書を作成することになるが、完成までのスケジュールについて事務局から説明をお願いしたい。

《略：事務局説明》

田形和幸会長：それでは本日の議事は終了したので、第6回行革審を終了する。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸